



御影堂の修復に思う

岡村喜史

## 東大寺大仏殿に次ぐ規模

昨年の春、本山の御影堂が十年間に及ぶ修復工事を終え、堂々とした姿を現しました。

本願寺の御影堂は現在、国の重要文化財に指定されています。このため、修復にあたっては、国から補助金をいただきました。

国の国宝や重要文化財に指定されている建造物をみていきますと、本願寺の御影堂が日本の指定物件としては、二番目に大きな規模を持ったものであることがわかります。

ところで、国の指定を受けた建造物で一番大きなものといえますと、国宝に指定されています奈良の東大寺大仏殿です。「やっぱり」という感じがします。ところが、考えてみますと大仏殿と御影堂では、大きく性格が違うことがわかります。

## 参拝者を重視した建造物

東大寺の大仏殿は、よく知られていますようにあの大きな毘盧遮那仏と呼ばれる大仏を安置するための建物です。大仏殿を訪れますとわかるように、お堂の真ん中に大仏がおられますが、参詣者のための場所はほとんどありません。ですから、東大寺の大仏殿は、あの大きな大仏を収める目的で造られた建物であることがわかります。

これに対して本願寺の御影堂を見てみますと、等身大の親鸞聖人のお木像（御真影）を安置する内陣は、御影堂全体の十三分の一程度のスペースしかありません。また御影堂のほぼ三分の二にも及ぶ広い空間がとられているのは外陣になります。このように、外陣が大きくとられているということは、御影堂は、参拝に来られた全国の門信徒の方々がお参りをすることを最も重視されて建てられたものであることがわかります。

御影堂の歴史を考えていきますと、東山大谷の地に営まれた親鸞聖人の廟所に、その教えを受けた門弟の方々が、聖人に感謝する気持ちを持ち続けるために、聖人のお木像を安置されました。このお木像が安置された御

影堂から発展していったのが、本願寺です。ですから、毎年の報恩講をはじめ、重要な法要は御影堂において営まれています。

特に室町時代になって、本願寺の第八代蓮如上人が布教に努められたため、全国に門徒が広がり、多くの方々が各地から本願寺の御影堂に安置されている親鸞聖人のもとに来られるようになりました。こうして参拝される人々のために御影堂は大きなものが必要とされていったのです。

## 先人たちの深い思い

現在の本願寺御影堂は、江戸時代初めの寛永十三年（一六三六）に再建されたものです。その後五十年ごとに執り行われます親鸞聖人の大遠忌にあわせて修復が繰り返されてきました。なかでも文化八年（一八一）の親鸞聖人五百五十回忌法要のために行われた修復は大々的なものであったようです。

今回の御影堂の修復にあたって、屋根裏の小屋組のなかに入って部材の調査をさせていただきました。すると、この文化年間の修復の時に各地から寄進された材木が使用されていることが、その寄進銘からわかりました。滋賀・京都・大阪・兵庫を始め、中国地方などから材木が寄進されているなかにも、「大津東派同行中」による寄進銘がありました。江戸時代に行われた本願寺の御影堂の修復に際して、宗派を超えて大谷派の門徒まで力を寄せていたことに驚きました。親鸞聖人の大遠忌法要にあたって御影堂修復への思いがひとかたならないものであったことが想像されるとともに、先人の方々の思いの深さを知ることができました。

## 一年のたしなみ

『蓮如上人御一代記聞書』のなかにも、蓮如上人の門弟で越中（富山県）赤尾の道宗が語った言葉として次のようなものがあります。

一 赤尾の道宗申され候ふ。一日のたしなみには朝つとめにかかきじとたしなむべし。一月のたしなみにはちかきところ御開山様（親鸞）の御座候ふところへまゐるべしとたしなめ、一年のたしなみには御本寺へまゐるべしとたしなむべしと云々。これを円如様きこしめしおよばれ、よく申したると仰せられ候ふ。

（『註釈版聖典』一二四七頁）

道宗は、交通手段の不便な室町時代にあって、富山県の地から一年に一度は本願寺に参拝したいと言っています。本願寺に対する思いの深さが感じられます。

列車やバスが利用できるようになり便利になった現代社会にあって、私たちはいつでも容易く本願寺の親鸞聖人のもとにお参りすることができるようになりました。このため、本願寺にお参りするという本来の目的が忘れがちになっているように思われます。

この度の七百五十回大遠忌は、五十年に一度しかない大切な法要です。今まで維持されてこられた方々のご苦勞を思いながら、あらためて親鸞聖人への感謝の気持ちを確かに持って、お参りしたいと思います。

(龍谷大学文学部准教授)